

実施過程	実施内容・要点	時間 90分	プレゼン	進行者の主な指示例・発問例	*留意点 【 】内は使用する資料名
はじめに	◎本校内研修の概略説明 ○ウォーミングアップ 1 ねらいの確認 (1) Q-Uに関する基礎的な内容を理解し、学級集団や個人の状態を把握する。 (2) Q-Uの結果を活用して、具体的な支援・援助策を検討する。	3 2	1 2	[説明] 今日「Q-Uを活用した いじめ予防～学級集団の状態把握と援助策の検討～」について研修します。 [指示] 研修の前にウォーミングアップとして「ポジティブしりとり」をやってみましょう。グループ内で自分に関することについて、しりとりを行います。ポジティブしりとりですので、自分の得意なこと、好きなもの、興味のあること、楽しかったことなどに、単語で言っていきます。その際、理由も付け加えて言ってください。例えば、「いちご。一番好きな果物だからです」→「ご。ごまふあざらし。かわいいからです」→「し。新体操。学生時代にやっていました」→「う。植木。最近の趣味です」というように、3分間でできるだけたくさん繋げられるようにします。グループの中で一番誕生日の早い方、挙手してください。(挙手)ありがとうございます。その方から時計回りにいきましょう。それでは、始めてください。(3分間)いかがでしたか?ポジティブなものがたくさん出てきましたね。何を言っているのか分からないときに教え合ったり、笑いが起きたりととてもいい雰囲気でした。このように助け合ったり、笑いがあつたりするクラスだといじめは起きにくいですね。今日の研修も、このようにお互いに助け合いながら協力してやっていきましょう。 [説明] それでは、研修に入りましょう。今日の研修のねらいは(1) Q-Uに関する基礎的な内容を理解し、学級集団や個人の状態を把握する。(2) Q-Uの結果を活用して、具体的な支援・援助策を検討する。の2つです。	*前もって演習時の3～4名のグループを作っておき、まとまって座ってもらうようにする。 *ウォーミングアップでは、リラックスしたり教え合ったりする雰囲気をつくる。教育相談係で実際に例を示してみるのもよい。 *ウォーミングアップは、学校の実態に応じて省略することも可能である。 【テキスト資料】 *研修の目的を押さえてから研修に入る。できるだけゆっくりと丁寧に説明する。さらに、なぜこの学校でこの研修が必要なのか具体的な事例を入れながら話すとよい。
I 説明	2 Q-Uについて (1) Q-U(楽しい学校生活を送るためのアンケート)とは? ①学校生活での満足感と意欲を質問紙によって測定するもの ②学級集団の状態を把握するために開発されたアンケート調査 (2) Q-Uの特長 ①実施・活用しやすい ②個人の内面、集団の状態、個人と集団の関係がわかる (3) Q-U実施の目的 問題行動の未然防止や意欲的な言動の喚起・促進に役立てる (4) Q-Uの構成と結果の見方 ①「いごちのよいクラスにするためのアンケート」 4群(学級生活満足群、非承認群、侵害行為認知群、要支援群を含む学級生活不満足群) ア 縦軸－承認感＝リレーション イ 横軸－被侵害感＝ルール ②「やる気のあるクラスをつくるためのアンケート」 5領域(友人との関係、学習意欲、教師との関係、学級との関係、進路意識) ③「日常の行動を繰り返すアンケート」 2尺度(配慮、かかわり) (5) Q-U活用の留意点 3 Q-Uから見たいじめ予防 (1) 高等学校におけるいじめの件数 (2) 学級の状態から ①いじめの発生率 ②学級の型によるいじめの特徴 (3) 個人の状態から ①いじめられている可能性のある生徒の傾向 被侵害得点が高い生徒 ②いじめ予防に関する留意点	1 1 1 10 10 15 16 18 2 2	3 4 5 6 7 8 9 10 15 16 18 19 20	[説明] 「2 Q-Uについて」の説明をします。Q-Uとは、「楽しい学校生活を送るためのアンケート」という個人と学級集団の状態が把握できる調査です。この調査では生徒個人の学校生活での満足感と意欲と学級集団の状態が把握できます。 [説明] Q-Uを実施することにより、学級の実態を個人と集団のレベルで把握することができるため、学級の課題を解決していくヒントが得られます。なお、Q-Uは、個人や学級の状態を捉え、生徒の支援や学級経営の方針をつかむためのものであって、担任の評価資料ではありません。 [説明] (2) Q-Uの特長です。Q-Uは10～15分の短時間で実施でき、結果が活用しやすいのが特長です。先ほども説明しましたが、個人及び集団の実態、個人と集団の関係性が把握できる信頼性の高い調査です。 [説明] (3) Q-Uは、生徒個人の心理面、行動面の理解を深め、現状の学級集団の状態を適切に把握し、それに基づいて計画的な指導・援助を行うことで、問題行動の未然防止や意欲的な言動の喚起・促進を図ることを目的に実施します。 [説明] (4) Q-Uの構成と結果の見方です。Q-Uは、「いごちのよいクラスにするためのアンケート」「やる気のあるクラスをつくるためのアンケート」の2つのアンケートから構成されています。「日常の行動を繰り返すアンケート」はhyper-Q Uにのみ入っています。 [説明] 「いごちのよいクラスにするためのアンケート」の結果は、4群のプロットで表示されます。テキスト資料のP.1をご覧ください。4群とは、テキスト資料のP.1にある、学級生活満足群、非承認群、侵害行為認知群、学級生活不満足群のことです。要支援群は学級生活不満足群の一部と考えます。この時の縦軸を「承認得点」、横軸を「被侵害得点」と呼びます。縦軸(承認得点)は上に行くほど、他者から認められていると感じている程度が高く、下に行くほど他者から認められていると感じる程度が低いということを表します。この承認得点からは、クラス内のリレーション(関係性)形成の程度がわかります。リレーションとは、互いに構えのない、ふれあいのある本音の感情交流が行える人間関係のことです。承認感の高い生徒は、自分に自信があるため、他者を攻撃してまで優位に立とうとする必要がありません。従って、承認感の高いクラスでは、仲間意識が生まれやすくなり、集団活動が協力的に、活発になされるようになります。 横軸(被侵害得点)は、右に行くほど、嫌な思いをしている程度が低く、左に行くほど嫌な思いをしている程度が高い、ということを表します。この被侵害得点からは、クラス内のルール徹底の程度がわかります。教師の指示が生徒に届いているとき、生徒は嫌な思いをしなくて済むため、被侵害感の低い生徒が多くなります。反対に、教師の指示が生徒に届いていないときは、被侵害感の高い生徒が多くなります。対人関係に関するルール、集団活動や生活をする際のルールが生徒に理解され、ルールに沿った行動が定着すれば、対人関係のトラブルが減少して、人との関わりに安心感が生まれます。 縦軸と横軸の交点は全国平均を表します。 次に、特徴的な学級のタイプについて説明します。参考資料をご覧ください(以下、「親和的なまとまりのある学級集団」、「かたさのみみられる学級集団」、「ゆるみのみみられる学級集団」、「不安定な要素を持った／荒れのみみられる学級集団」、「教育環境の低下した学級集団」、「拡散した学級集団」の順に説明する)。 実際のQ-Uのデータを見ると、予想に反する場所に生徒がプロットされていたり、返ってくるコメントがクラスの実態を反映していないように感じられるときがあります。この場合、生徒が正確に回答していなかったり、教師に対して反発したりしていることも考えられますが、実際は教師の自己盲点を教えてくれたりしている場合も少なくないため、謙虚な姿勢で結果と向き合うことが大切です。 また、hyper-Q Uのコメントは、学級満足度だけではなく、学級生活意欲の結果も加味して出されていますので、その点についても注意が必要です。 [説明] 「やる気のあるクラスをつくるためのアンケート」の結果は、友人との関係、学習意欲、教師との関係、学級との関係、進路意識の5領域の折れ線グラフで表示されます。グラフから学級生活での意欲がどの領域で高いか(低いか)がわかります。アンバランスな生徒やすべての項目が低い生徒には細やかな対応が必要です。また、学習意欲の低い生徒が数多く学級生活満足群に位置している場合や、反対に学習意欲の高い生徒が数多く学級生活不満足群に位置している場合は、注意が必要です。 [説明] 「日常の行動を繰り返すアンケート」(hyper-Q U)の結果からは、集団形成に必要な対人関係を営むためのスキルが、生徒にどの程度身に付いているかがわかります。「配慮のスキル」の結果からは、他人を尊重する姿勢が、行動レベルで実行されているかどうかわかります。「かかわりのスキル」の結果からは、人と関わるきっかけや関係の維持、感情交流の形成ができていくかどうかわかります。 [説明] (5) Q-Uを活用する際の主な留意点は、①結果をもとに生徒を叱責したり、結果を公表したりしない。②調査をしたら、丁寧な対応をすぐに行う。③原因は教師のパーソナリティ(人格や性格)に求めず、マッチング(学級の実態と指導・援助法の組み合わせ)に求める。④日常観察も大事にし、継続して柔軟に対応する。⑤結果はできるだけ複数の人で考察し、多くの違った視点から支援策等を考える。などです。以上でQ-Uに関する基本的な説明は終わります。 [説明] 「3 Q-Uから見たいじめ予防」については、演習をしながら説明していきます。	【テキスト資料・参考資料】 *テキスト資料を参照しながら、プレゼン資料をもとに説明していく。必要に応じて参考資料も見てもらうようにする。 *Q-Uは健康診断のようなものなので、問題の早期発見、早期対応のためにあまり抵抗を感じず行ってよいこと、Q-Uの結果がおもしろくないものであっても、それは担任のパーソナリティのせいではなく、学級の状態と援助方法のマッチングの問題であることを強調する。 *参考資料を基に6つの学級のタイプについて、大まかに説明し、詳細については資料を見てもらう。 ・親和的なまとまりのある学級集団(満足型) →ルールとリレーションが同時に確立している状態 ・かたさのみみられる学級集団(縦型) →リレーションの確立がやや低い状態 ・ゆるみのみみられる学級集団(横型) →ルールの確立がやや低い状態 ・不安定な要素をもった／荒れのみみられる学級集団(斜め型) →ルールとリレーションの確立がともに低い状態 ・教育環境の低下した学級集団(崩壊型) →ルールとリレーションがともに喪失した状態 ・拡散した学級集団(拡散型) →ルールとリレーションの共通感覚がない状態
II 演習	4 演習 ○演習1「アセスメントをしよう」 ○演習2「支援・援助策を考えよう」	60	21 ～ 23	[指示] 引き続き演習に入ります。(演習進行案1、2を参照) [指示] 以上で演習を終わります。	【演習進行案】 *事例は自校のなかから提供してもらおう。できれば、自分の学級のものがあればよい。進行者はグループに入らず、話し合いの様子を観察する。
III まとめ	◎活動の振り返り ◎進行者のまとめ (被侵害得点)が高い生徒→要注意 (ルール)と(リレーション)の確立した(親和的なまとまりのある)学級集団をめざす	8	24 25	[指示] 今日の研修の感想をお願いします。 [説明] 大切なキーワードを確認して終わりたいと思います。テキスト資料の括弧のなかを埋めてみてください。(1分程度時間をとる)では私が読んでみます。「(被侵害得点)が高い生徒は、いじめられている可能性が特に高いので注意が必要です。また、いじめが生じにくい学級集団は(ルール)と(リレーション)の確立した(親和的なまとまりのある)学級集団」です。今日の研修をもとにQ-Uの結果を有効に活用され、先生方がさらに居心地のよい、やる気のある、いじめを生まない学級づくりをしていかれることを期待しています。今回の研修では、Q-Uの基本的な説明とごく一部の読み取りしかできませんでした。Q-Uに関しては、たくさんの本も出ていますし、研修会も実施されていますので、ぜひ、研修を深めていってください。(称賛)先生方の熱心な取組みが大変印象に残りました。ありがとうございました。	【テキスト資料】 *感想に対して、肯定的なフィードバックを行い、研修を通して感じたことを共有させる。 *テキストを基に演習のまとめは丁寧に。 *Q-Uの結果や事例等は回収し、係や進行者などの責任者が確実に処理する。

Q-Uを活用した いじめ予防 ～学級集団の状態把握と援助策の検討～

1 ねらいの確認

- (1) Q-Uに関する基礎的な内容を理解し、学級集団や個人の状態を把握する。
- (2) Q-Uの結果を活用して、具体的な支援・援助策を検討する。

2 Q-Uについて

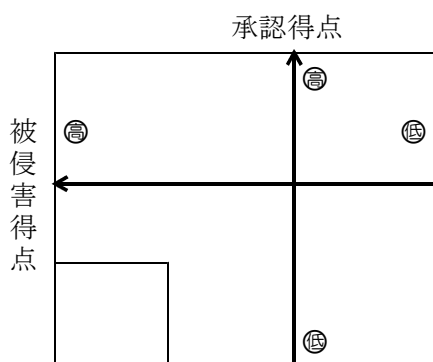
- (1) Q-U（楽しい学校生活を送るためのアンケート）とは？
 - ① 生徒の学校生活での満足感と意欲を、質問紙によって測定するもの。
 - ② 学級集団の状態を把握するために開発されたアンケート調査。
- (2) Q-Uの特長
 - ① 実施・活用しやすい。
 - ② 個人の内面、集団の状態、個人と集団の関係性がわかる。
- (3) Q-U実施の目的

生徒の心理面、行動面の理解を深め、現状の学級集団の状態を適切に把握し、計画的な指導と援助を積極的に行うことで、問題行動の未然防止や意欲的な言動の喚起・促進に役立てる。

(4) Q-Uの構成と結果の見方

- ① 「いごこちのよいクラスにするためのアンケート」
 =学級満足度：4群のプロットで表示される。
 ◇学級生活満足群
 ◇非承認群
 ◇侵害行為認知群
 ◇学級生活不満足群（要支援群を含む）

侵害行為認知群	学級生活満足群
学級生活不満足群	非承認群
要支援群	



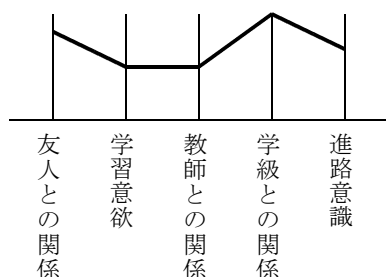
- ・縦軸……承認感の高低を表す。
 =集団のリレーション（関係性）形成の程度がわかる。
 設問 NO. 1～10
- ・横軸……被害感の高低を表す。
 =集団のルール徹底の程度がわかる。
 設問 No. 11～20
- ・縦軸と横軸との交点……全国平均を示す。

〈6つの学級のタイプ〉

親和的なまとまりのある学級集団 (満足型)	ルールとリレーションが同時に確立している状態
かたさのみられる学級集団 (縦型)	リレーションの確立がやや低い状態
ゆるみのみられる学級集団 (横型)	ルールの確立がやや低い状態
不安定な要素をもった／ 荒れのみられる学級集団 (斜め型)	ルールとリレーションの確立がともに低い状態
教育環境の低下した学級集団 (崩壊型)	ルールとリレーションがともに喪失した状態
拡散した学級集団 (拡散型)	ルールとリレーションの共通感覚がない状態

テキスト資料（進行者用・研修者用）

- ② 「やる気のあるクラスをつくるためのアンケート」
 = 学校生活意欲：5領域の折れ線グラフで表示される。



- ◇ 友人との関係 設問 No. 1～4
- ◇ 学習意欲 設問 No. 5～8
- ◇ 教師との関係 設問 No. 9～12
- ◇ 学級との関係 設問 No. 13～16
- ◇ 進路意識 設問 No. 17～20

- ・ 毎日の生活に、どの程度意欲を持って取り組むことができているのかがわかる。
- ・ 学級生活での意欲が、どの領域について高いか（低い）かがわかる。

- ③ 「日常の行動を振り返るアンケート」（hyper-QUのみ）

= ソーシャルスキル：2種類のスキルのバランスで表示される。

- ・ 「配慮」のスキル…… 他者を尊重する姿勢が行動レベルで実行されているかどうか（思いやり力）がわかる。
- ・ 「かかわり」のスキル… 配慮のスキルを前提に、人と関わるきっかけや関係の維持、感情交流の形成ができているかどうかわかる。

(5) Q-U活用の留意点

- ① 結果をもとに生徒を叱責したり、結果を公表したりしない。
- ② 調査をしたら、丁寧な対応をすぐに行う。
- ③ 原因は教師のパーソナリティーに求めず、学級の状態と教師の援助法のマッチングに求める。
- ④ 日常観察も大事にし、継続して柔軟に対応する。
- ⑤ 結果は、できるだけ複数の人で考察し、多くの違った視点から支援策等を考える。

3 Q-Uから見たいじめ予防

(1) 高等学校におけるいじめの認知件数

（平成26年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」文部科学省）

	全国の高等学校（1校あたり）	福島県の高等学校（1校あたり）
いじめの認知件数(件)	11,404（約2.0）	142（約1.3）

※ ハイน์リッヒの法則・・・1件の深刻な問題の裏には、軽微な問題が29件、問題になる前のひやっとした事案が300件。

(2) 学級の状態から

① いじめの発生率

いじめは、どんな学級でも起こる可能性がある

しかし・・・

親和的なまとまりのある学級集団（満足型）のいじめ発生率を1とした場合

→かたさのみられる学級集団（縦型）は約2倍

→ゆるみのみられる学級集団（横型）は約3倍

→不安定な要素をもった／荒れのみられる学級集団は約5倍

② 学級の型によるいじめの特徴

〈親和的なまとまりのある学級集団（満足型）〉

- ・ルールとリレーションが確立しており、いじめが起きにくい。

〈かたさのみられる学級集団（縦型）〉

- ・ルールが重視され、表面的には抑制されているようにみえる。
- ・教師の目の届かないところで陰湿ないじめが起きている場合がある。
- ・生徒間に地位の高低が起きやすく能力の低い生徒がいじめの対象になりやすい。

〈ゆるみのみられる学級集団（横型）〉

- ・小グループ間や小グループ内でのいじめが起きやすい。
- ・誰もがいじめの対象となる可能性が高い。
- ・グループで普通に活動しているように見えるので、いじめに気付かない場合が多い。
- ・いじめの対象が短期間で変わるので、いじめられている生徒の特定が難しい。

(3) 個人の状態から

① いじめられている可能性のある生徒の傾向

- ・被侵害得点の中に5が一つでもある生徒、または4が複数ある生徒。
- ・侵害行為認知群、学級生活不満足群に入っている生徒。

② いじめ予防に関する留意点

- ・どの生徒も被害者にも加害者にもなり得る。
- ・いじめられる相手は、特定の人ではない場合が多い。
- ・いじめられている生徒本人にも原因があると思われやすく、発見されにくい場合がある。
- ・いじめられている生徒は、不安感と攻撃性が高まり、いじめの加害者になる場合もある。
- ・いじめられている子をかばうことができる子は効力感や向社会性が高い。
- ・いじめを知っていても、止められる生徒は少ない。

4 演習

演習1 「アセスメントをしよう」

演習2 「支援・援助策を考えよう」

※ 【演習進行案1、2】参照

5 まとめ () に本日の研修のキーワードを入れてみましょう

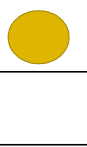
- | |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>○ () 得点) が高い生徒
→いじめられている可能性が特に高いので注意が必要</p> <p>○ いじめが生じにくい学級集団
→ () と () の確立した () 学級集団</p> |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------|

Q-Uの結果の見方と指導のポイント

1 いごちのよいクラスにするためのアンケート (1) 学級集団について

**【親和的なまとまりのある学級集団】
(満足型)**

～ルールとリレーションが同時に確立している状態～

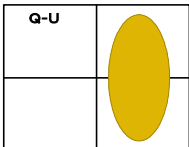
Q-U	

- ・学級にルールが内在化
- ・主体的な生徒の活動
- ・和気藹々（あいあい）
- ・認め合い、助け合い
- ・担任不在でもある程度活動可能

* 全体の70%以上が満足群に位置している

**【かたさのみられる学級集団】
(管理型)**

～リレーションの確立がやや低い状態～

Q-U	

- ・一見静かで落ち着いて見える
- ・生徒達の意欲に大きな差
- ・生徒同士の関係に距離
- ・人間関係が希薄
- ・教師の評価を気にする傾向
- ・学級活動も低調気味

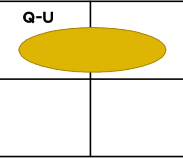
* 満足群と非承認群に70%以上が位置している

- 現在の方針で学級経営を継続してよい。
- 生徒主体の活動を多く取り入れる。
- 教師は委任的なリーダーシップをとる。
- 生徒の関係の質を高める。

- 生徒同士が認め合える場を設定する。
- 教師は役割だけでない自分を出し、自らモデルを示す。
- がんばりを促す言葉かけをするなど、生徒の緊張感を取り除く。

**【ゆるみのみられる学級集団】
(なれあい型)**

～ルールの確立がやや低い状態～

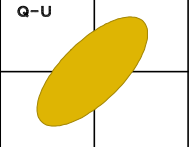
Q-U	

- ・一見、元気でのびのびと見える
- ・学級のルールが低下
- ・授業中の私語
- ・係活動の遂行に支障
- ・トラブルの頻発
- ・力の強い生徒に学級全体が牛耳られてしまう傾向

* 満足群と侵害行為認知群に70%以上が位置している

**【不安定な要素をもった／
荒れのみられる学級集団】
(荒れ始め型)**

～ルールとリレーションがともに低い状態～

Q-U	

- ・かたさやゆるみの見られる状態
+ 具体的対応なし→荒れ始めへ
- ・一見静かで落ち着いた学級、一見元気でにぎやかな学級というプラスの側面の喪失
- ・互いに傷つけ合う言動の増加

- 生徒の不満の要因を探る。
- 生徒同士のかかわり合いを促進する。
- 最低限の明確なルールのもとで活動させる。
- 短時間で意識的な活動を繰り返させる。
- ルール違反ははっきりと指摘する。
- 教師自身もルールを意識して行動する。

- 生徒同士が認め合える活動を取り入れる。
- 生徒の長所を意識的に観察し評価する。
- 教師は活動のプロセスを認める。
- 教師のリーダーシップを発揮する。
- 教師も生徒の前で自己開示をする。
- 学校組織での介入も必要である。

**【教育環境の低下した学級集団】
（崩壊型）**

～ルールとリレーションがともに喪失した状態～

Q-U	
●	

- ・学級生活不満足群に70%以上の生徒がプロットされている状態
- ・すでに教育環境とはいえない
- ・私語と逸脱行動の横行
- ・教師へ露骨な反抗、授業不成立

*全体の70%以上が不満足群に位置している

**【拡散した学級集団】
（拡散型）**

～ルールとリレーションの共通感覚がない状態～

Q-U	●
●	●

- ・すべての群に分布が拡散している状態
- ・生徒たちの学級への帰属意識低い
- ・友だち同士の関係づくりが困難
- ・自分勝手に行動している



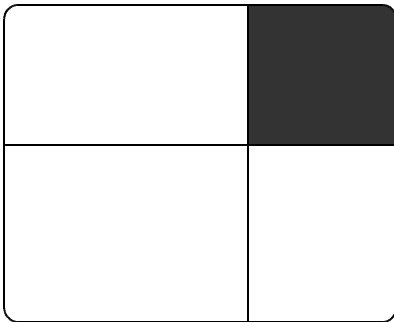
- 学校全体で組織的な対応をする。
- 生徒と一対一の信頼関係を築く。
- 暴力的な生徒がいる場合は、まわりの生徒のコーピング（対処法）を高める。
- 個々で取り組めるプリントなどの作業学習を多くする。



- 教師がほめる視点を決め、生徒の行動目標を方向付け、ルールづくりをする。
- 教師が中心となって、友だち作りの方法をロールプレイなどを使って教える。
- 不満足群の生徒とは早急に面接を行い援助をする。

(2) 一人一人の生徒について

① 学級生活満足群にプロットされた生徒



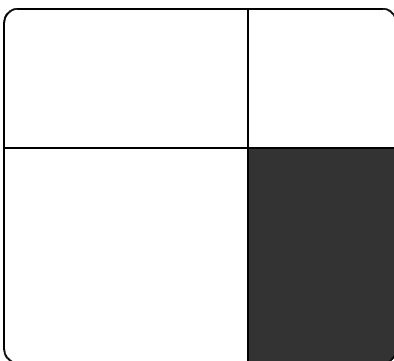
→ 「承認得点」高い、「被侵害得点」低い

- [特徴]
- 学級内に自分の居場所がある。
 - 不適応感やトラブル少ない。
 - 学級生活・活動に満足している。
 - 意欲的に取り組んでいる。
 - 学級全体の指示で、自ら行動できる。



[留意点] ※ **現状を維持でき、より広い領域で活動できるような援助**

② 非承認群にプロットされた生徒



→ 「承認得点」低い、「被侵害得点」低い

- [特徴]
- 不安となる出来事は少ない。
 - 学級内で認められることが少ない。
 - 自主的に活動することが少ない。
 - 意欲が低い。



[留意点] ※ **全体の指示後にさりげない個別指導**
 ※ **意欲を喚起するような言葉かけ**
 ※ **級友から認められるような場面設定の工夫**

③ 侵害行為認知群にプロットされた生徒



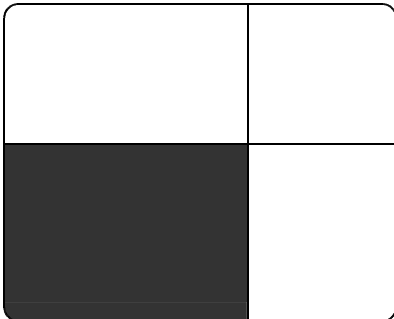
→「承認得点」高い、「被害得点」高い

- [特徴]
- 学級生活や諸々の活動に意欲的である。
 - 自己中心的な面がある。
 - よくトラブルを起こす。
 - 被害者意識が強い。
 - 深刻ないじめを受けている場合もある。



- [留意点]
- ※ 対人関係の調整を中心とした個別の配慮
 - ※ 時間をとってトラブルへの対処法を考えさせる

④ 学級生活不満足群にプロットされた生徒



→「承認得点」低い、「被害得点」高い

- [特徴]
- いじめや悪ふざけを受けている可能性が高い。
 - 不安傾向が非常に強い。
 - 不適応になっている可能性がある。
 - 学級の中で居場所がない。
 - 不登校になる可能性が高い。



- [留意点]
- ※ 早急な個別の面談
 - ※ 計画的で具体的な対応

2 やる気のあるクラスをつくるためのアンケート

- (1) 友人との関係…クラスメイトと親和的な関係を築くことへの意欲
- (2) 学習意欲…学習に対する意欲
- (3) 教師との関係…教師と親和的な関係を築くことへの意欲
- (4) 学級との関係…クラスでの活動への意欲
- (5) 進路意識…将来や職業について考えることに対する意欲

- ※ 全体的に高い生徒 →学校生活に積極的に関わっている。自分の活動に満足している。学級のなかでリーダーシップをとることができる。
- ※ 中間的な生徒 →強いリーダーシップをとる子の影に隠れがち。よい面を積極的に見つけ、伸ばすようにする。
- ※ 全体的に低い生徒 →諸活動に意欲を持って関われない。自分の活動に満足していない。不登校に至る危険性がある。
- ※ アンバランスな生徒 →特に低い領域において問題を抱えている可能性がある。個別支援の際の資料とする。

演習用紙

	いいところ	気になるところ	支援・援助策
学 級			
個 人			

「アセスメントをしよう」

〈準備物〉

- ・ Q-U結果コピー (グループの人数分)
- ・ カラーペン数色、筆記用具 (各自)

演習のねらいと進め方の説明 (5分)

- ・ 「これから、私の進行に従って結果を見ていきたいと思います。今回は、グループごとに同じ資料をお渡ししています。途中、説明も加えますので必要であればメモをしながら進めてください」
- ・ 「それでは、演習 1 『アセスメントをしよう』を行います。この演習では、学級集団や生徒一人ひとりがどのような状態なのかを見ていきます。今回はいじめ予防がテーマですのでそこに焦点を当てて読み取りを行っていきます」

〔説明〕

※ テキスト資料 P. 2 の 3 (1) をご覧ください。

平成 26 年度の文部科学省の調査によるいじめの認知件数は、全国の国・公・私立高等学校 5,730 校で、11,404 件ですので、単純に計算して 1 校あたり約 2.0 件ということになります。福島県内の高等学校でも、1 校あたり約 1.3 件の報告があります。

しかし、この数はあくまで文部科学省に報告されたものです。ハインリッヒの法則で考えれば、1 つのいじめの背景には報告するまでには至っていない軽微なケースが 29 件、いじめになる前のひやっとする言動が 300 件あることになります。

そのように考えると、いじめとして認識されないまでも、福島県内の各高等学校でも 1 校あたり年間 300～400 件のいじめにつながる可能性のある事例が起きているということになります。

いじめ防止対策推進法により、各校でいじめ防止への取り組みが行われていますが、すべての教師が更なる危機感をもって対応していかなければなりません。



学級全体の読み取り (10分)

- ・ 「初めに学級全体から見てみます。まず、『①Q-U結果のまとめ』をご覧ください。リレーシヨンの程度、ルール程度はどうか。どの群にどれだけの生徒が入っているでしょうか」 (様子を見て)
- ・ 次に『①-B学級集団理解シート (hyper-QUのみ)』をご覧ください。左下の『学級満足度尺度からみた学級集団のようす』を見て、学級の状態を確認してください。(様子を見て) 確認できましたか。それでは、それぞれの学級集団のタイプがどのような状態なのか説明していきます」

〔説明〕

※ テキスト資料 P. 2 の 3 (2) をご覧ください。

いじめは、どんな学級でも起こる可能性があります。しかし、明らかに学級集団のタイプによって発生率が変わってきます。

例えば、親和的なまとまりのある学級集団 (満足型) の発生率を 1 として比較すると、かたさのみられる学級集団 (縦型) では約 2 倍、ゆるみのみられる学級集団 (横型) では約 3 倍、不安定な要素をもった／荒れのみられる学級集団では約 5 倍となっています。

かたさのみられる学級集団では、発生率が低いように見えますが、教師主導のルール

演習進行案 1 (進行者用)

を重視した学級経営が行われているので表面的には抑制されていますが、教師の目の届かないところで陰湿ないじめが行われている場合があります。かたさのみられる学級集団では、教師の評価の高低により、生徒の間に地位の高低が起きやすく能力の低い子はいじめられても仕方ないというような考えが学級に蔓延してしまいます。教師の強い指導によるストレスを弱いものをいじめるという形で発散している生徒もでできます。

ゆるみのみられる学級集団では、誰もがいじめの対象となる可能性が高く、いじめられている生徒の特定が難しいです。学級内で小グループができている場合が多く、対立するグループの目立つ子が標的にされたり、グループ内部でいじめられたりすることが多くあります。このような状況では、グループへの忠誠心や自分がいじめられないようにしたいという思いから、いじめに同調してしまいがちです。グループで普通に活動しているように見えるので、周りはいじめに気付かない場合が多いです。また、グループ内でターゲットが短期間で変わるので特定しづらい面もあります。

不安定な要素をもった／荒れのみられる学級集団、教育環境の低下した学級集団でいじめが横行しているのは、容易に想像できます。

ですから、全くいじめが起きないということではありませんが、ルールとリレーションが確立している親和的なまとまりのある学級集団が、一番いじめを生みづらい学級ということになります。

- ・「どの学級のタイプだから安心ということはありませんが、いじめを生まないために、できるだけ親和的なまとまりのある学級集団にしていくことが大切です」



個人の状態の読み取り (20分)

- ・「次は、生徒一人ひとりの状態を見ていきましょう」

【説明】

※ テキスト資料P. 3の3 (3) をご覧ください。

いじめられている子の95%は、侵害行為認知群、学級生活不満足群に入っています。

いじめられている子は、当然、不安感が高く、なぜ自分がいじめられなければいけないのかという理不尽な気持ちや自分を守るといった本能的な働きから攻撃性も高くなる場合があります。

また、いじめられている子は、教師から見ると、友人関係をうまくもてない子、感情をコントロールできない子、攻撃性が強い子というように認識されている場合が多く、トラブルが起きても本人の原因が大きいと考え、いじめと気付かず発見できない場合があります。それどころか、何かあっても本人に問題があると捉え、本人を指導して済ませてしまうこともあり、ますますいじめが深刻化し、大事に至ってしまうケースもあります。

- ・「それでは、『③Q-U回答一覧表』をご覧ください。被侵害得点の項目で5が一つでもある生徒、または4が複数ある生徒を確認してください。そして、5や4がどの項目に付いているかも見てください」(様子を見て)
- ・「次に、その生徒が『①Q-U結果のまとめ』のどの群にプロットされているかを確認してください」
- ・「続いて、『①Q-U結果のまとめ』で満足群にプロットされている生徒について、『②Q-U学校生活意欲プロフィール』(折れ線グラフで示されているもの)で、学習意欲が低い生徒がいなくどうか確認してください」(様子を見て)
- ・「その生徒の中で、『友人との関係』だけが低い生徒がいれば、本人は満足していると答えていますが、学校としては困っている生徒の場合があります」

演習進行案 1 (進行者用)

- ・「今度は、侵害行為認知群、学級生活不満足群に入っている生徒を確認してください。左側にいけばいくほどいじめを受けている可能性が高くなります」(様子を見て)
- ・「それでは、先ほどの気になる生徒について、もう少し詳しく見ていきましょう。『②Q-U 学校生活意欲プロフィール』をご覧ください。気になる生徒のプロフィールで、どこの項目が高いか低いかを確認してください」(様子を見て)

~~~~~  
【ここは、hyper-Q U実施の場合のみ】

- ・「次に、『④hyper-Q U ソーシャルスキル結果のまとめ』(ひし形の中に表されているもの)をご覧ください」
- ・「気になる生徒がどこにプロットされているか確認してください」(様子を見て)

### 〔説明〕

この表からは、「配慮」と「かかわり」のスキルのバランスがわかりますので、支援の際のヒントになります。

この表の右側にいくほど、対人関係における基本的なマナーが身につけていない生徒と考えることができます。自己中心的な部分が強く、トラブルになってしまうことが考えられます。

この表の左側にいくほど、人とかかわることが苦手な生徒と考えることができます。おとなしくまじめな生徒と思われがちなので注意が必要です。

ひし形の下の部分にプロットされている生徒は、交友関係をうまく築けず、周りから孤立してしまうタイプです。

- ~~~~~
- ・「以上の結果から、気になる生徒はどの点がよく、どの点が特に気になるか、グループで考えてみましょう」(様子を見て)

### 〔説明〕

いじめはどの学校、どの学級にも起こりうるものです。そして、どの生徒も被害者にも加害者にもなり得ます。Q-Uでは早急に支援を要する生徒や、今後被害にあうかもしれない生徒を把握することができます。例えば、『承認得点』や『かかわりのスキル』の低い生徒などがその一例です。

いじめの未然防止のためには、それらの生徒一人ひとりに気を配ることはもちろん、学級、学校全体で承認得点の向上や被侵害得点の低減に努めたり、配慮のスキルやかかわりのスキルを高めたりといった、予防・開発的な取り組みを行っていく必要があります。

- ・「学級のどのようところがよく、どのようところが気になるか、気になる生徒は誰かが分かったと思います。次の演習では、今の状態からいじめに発展しないための支援・援助策を考えていきます」

# 「支援・援助策を考えよう」

## 〈準備物〉

- ・Q-U結果コピー（グループの人数分）
- ・カラーペン数色、筆記用具（各自）
- ・演習用紙（グループ一枚）
- ・付箋紙（一人3枚）

## 演習のねらいと進め方の説明（7分）

- ・「演習2では、いじめに発展しないための具体的な支援・援助策を考えていきます」
- ・「グループのメンバーで考えたことをグループ毎の演習用紙に書き込んでいきます」
- ・「まず初めに、学級全体と気になる生徒のよいところと気になるところを先ほどの演習を参考にして、グループのメンバーで相談しながら演習用紙に書き込んでください。時間は5分間です」（5分間）
- ・「時間になりましたので、そこまでにしてください」



## 個人研究（10分）

- ・「次に、これらの気になるところを解決するためにどのような支援・援助策があるか考えてみましょう。学級・個人のどちらについてでもいいですので、初めは先生方一人ひとりで考え、考えたことを付箋紙に書いてください。担任の先生やかかわりのある先生が明日からすぐに実践できるように、いつ、誰が、どのように何をするか、演習用紙に書き込んだよいところやデータの支援の方針を使って具体的に書いてください。抽象的なものだと、実践するのが難しいので、できるだけ具体的な内容になるように心がけてください」
- ・「付箋紙は一人3枚準備しましたが、もっと必要な方は、こちらに声をかけてください。時間は10分間です」（10分間）
- ・「時間になりましたので、そこまでです」



## グループ研究（5分）

- ・「次に、グループの中で先生方一人一人が考えたことを一つずつ順番に演習用紙に貼りながら発表してください。似た内容はまとめて貼るなど工夫してください」
- ・「時間は5分間です」
- ※ 全体の進行者は、各グループを回って称賛しながら、具体的な案になるように声かけをする。
- ・「時間になりましたので、そこまでです」



## まとめ（3分）

- ・「具体的な案ができましたか。それでは、演習2を終わります」
- ・「高等学校におけるいじめ発見のきっかけの約7割が学校の教職員等となっています。日々、生徒達と接する私たちの役割は大きいものと自覚して、いじめで苦しむ生徒がでないような学級づくりをしていきたいですね」
- ※ 時間に余裕があれば、各グループの案を発表してもらうのもよい。

## 〈参考文献一覧〉

- ◇ 学級づくりのためのQ-U入門  
河村茂雄  
(2006 図書文化)
- ◇ Q-Uによる学級経営スーパーバイズ・ガイド 高等学校編  
河村茂雄・荏間澤勇人・粕谷貴志  
・武蔵由佳 企画・編集  
(2004 図書文化)
- ◇ データが語る①学校の課題  
河村茂雄  
(2007 図書文化)
- ◇ データが語る②子どもの実態  
河村茂雄  
(2007 図書文化)
- ◇ こうすれば学校教育の成果は上がる 課題分析で見つける次の一手！  
河村茂雄  
(2015 図書文化)